

国語研究資料

宮澤俊雅

この項は資料公刊の展望ではなく、資料研究の展望として、それも古代辞書を中心に行なうという約束で引き受けたので、大方の期待には添えないものとなる。対象資料は、資料研究が国語学の研究分野として容認される資料に限定し、八資料群を設定した「韻学・声明・音曲・テニハ・仮名遣・国学の資料群は、資料研究といえども音韻・国語学史等の扱いと判断して一時的に除外した」。それらの資料について、資料研究だけでなく、その資料による国語史研究の論考をも視野に入れて二〇四点の論考を入手し（その中には14集の呼び掛けに応じて惠贈された三点を含む。御三方にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。らに論説資料・海大国文研図書・国文学研究資料館開架雑誌・学会会場陳列書等により二二七点の論考を確認した（残余の未確認分——国語年鑑・国文学年鑑・国語と国文学雑誌要目等登載——は七一点。これに国語学会・訓点語学会研究発表のうち未成書分三九点も一応対象に含め、各資料群ごとに論考の内容には立ち入らず概略を見るのみで責を塞ぐこととする。なお主に国語年鑑登載の論考について、論題の全部或いは副題を省略したものがある。また誌名等に以下の略号を用いる。

叢史（国語語彙史の研究） 逸文（国書逸文研究） 鎌倉（鎌倉時代

語研究） 神田本（神田本白氏文集の研究 昭57・2） 訓訓（訓点語と訓占資料） 訓発（訓点語学会研究発表） 高山論（高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集） 国国（国語国文） 国と国（国語と国文学） 天理（天理図書館善本叢書） 東大（東京大学国語研究室資料叢書13 昭60・6） 六地（六地蔵寺善本叢刊）

訓点資料（二六八点）

訓点研究では従前に比して漢籍の比重が増した。中でも白氏文集と文選についての論考が多い。前者では1太田次男（神田本）、2同〔金沢文庫旧蔵白氏文集について〕（小尾博士記念論文集、昭58）、3同〔宮内庁書陵部蔵白氏文集新架府元亨本について〕（『斯道文庫論叢』20・21、昭59・3 昭60・3）、4小林芳規（神田本）、5当山日出夫〔神田本白氏文集索引〕（同）、6同〔訓訓69〕、7宇都宮睦男〔白氏文集訓点の研究〕（昭59・3）、8同（国国 昭60・4）、9川瀬一馬〔金沢本白氏文集覆製解説〕（『金沢本白氏文集』昭59・6）、10山口可奈子〔白氏文集卷三四の訓点について〕（『駒沢大大学院国文学会論集』13 昭60・2）等があり、後者には11柏谷嘉弘〔大阪大医療短大研究紀要』13〜15〕、12中村宗彦〔九条本文選古訓集〕（昭58・2）、13山崎誠〔鎌

倉7)、14松本光隆(鎌倉8)等がある。また尚書・毛詩関係では15築島裕「古文尚書訓点解説」(天理漢籍一 昭57・1)、16石塚晴通「岩崎本古文尚書・毛詩の訓点」(『東洋文庫書報』15 昭59・3)、17丸尾弓子「静岡国文学」5 昭57・12)、18稻垣瑞穂(同6、昭58・12)、19西崎亨(訓訓67)等があり、他に孝経・漢書楊雄伝・遊仙窟・長恨歌・老子経・荘子の訓点研究がある。

漢籍に比して仏典関係はさほど多くない。20小林芳規・松本光隆「防府天満宮藏妙法蓮華経八巻の訓点」(『内海文化研究紀要』12 昭59)、21築島裕「大随求陀羅尼経解題」(六地6 昭60・6)、22鈴木一男「石山寺旧藏『大智度論卷九十七』について」(『ヒブリア』85 昭60・10)の他に、大般若経・須陀婆経・最勝王経・理趣経・六波羅密経等の研究がある。法華経では為字について田島毓堂の一連の論考〔23〕(名古屋大文学部研究論集)28(31)等)があった。

国書の訓点研究では将門記と倭漢朗詠集関係が目立った。前者では24鈴木恵(鎌倉5)、25同「将門記古写本対校資料」(『東洋大短大紀要』14、昭58・3)、26浅野敏彦(『叢史』3 昭57・6)、27同(『同志社国語学論集』昭58・5)、28浦部重雄(『愛知淑徳大論集』9 昭58・12)、29同「楊守敬旧藏本・真福寺本対照将門記」(訓訓75)と三者三様に展開を見せる。後者では30金原理・竹原崇雄「倭漢朗詠集抄註解題」(『永青文庫叢刊』13 昭59・9)、31太田次男「倭漢朗詠集私注・倭漢朗詠集注解題」(六地4、昭60・1)、32西崎亨「武庫川女子大学図書館蔵嘉元三年写『倭漢朗詠集』小考」(『武庫川国文』25 昭60・3)、33三木雅博「和漢朗詠集私注」の変貌」(『梅光女子大学開学二十周年記念論文集』昭60・3)、34朽尾武「国会図書館蔵和漢朗詠集・内閣文庫蔵和漢朗詠集注漢字総索引」(昭60・10)と多彩である。また訓点

資料ではないが35小林芳規「古事記訓読について」(『日本思想大系』昭57・1)等の余波で古事記と訓点の関わりを論ずるものが36工藤力男(『国国』昭58・5)、37神野志隆光(『日本古典文学会会報』106)等数編ある。その他に38石塚晴通「圖書寮本日本書紀研究篇」(昭59・2)、39同「岩崎本日本書紀初点の合符」(『東洋学報』66、昭60・3)、40林勉「日本書紀兼石本解題」(天理56、昭58・9)、41木村景「東大和上東征伝」の解説本文」(『駒沢大文学部研究紀要』42 昭59・3)、42同・西崎亨「唐大和上東征伝」(昭59・9)、43太田次男「東寺観智院旧藏三教指帰注文安写本について」(成田山仏教研究所報昭58)、44同「尊経閣文庫蔵三教指帰鎌倉鈔本について」(『東方学』69、昭60・1)、45月本雅幸「文鏡秘府論解題」(六地7 昭59・10)、46金水敏「古文獻の計算機処理」——東京大学国語研究室蔵惠果和上之碑文」(昭59・7)47我妻多賀子「日本書紀私論」(『学習院大上代文学研究』8、昭58・3)、48井上宮蔵「靈異記訓釈の仮名遣考」(『就実論叢』13・14 昭58・12 昭59・12)、49小林芳規「日本往生極楽記の訓点」(天理57 昭59・1)、50同「世俗諺文の訓点」(同)、51馬淵和夫「醍醐寺蔵探要法花驗記」(昭60・11)、52藤本孝一「東洋文庫蔵本朝文粹卷二断簡」(逸文8 昭57・2)、53小林芳規「本朝文粹卷第十三の訓点」(天理57 昭59・1)、54同「作文大體の訓点」(同)、55同「六地藏寺蔵『江都督納言願文集』の訓点について」(六地3、昭59・7)、56三保忠夫「尾張国解文」宝生院本漢字索引」(訓訓74)、57「尾張国郡司百姓等解文」(『影印』(早稲田大学蔵資料影印叢書)14 昭60・12)、58山崎誠「建長六年書写覚院法印現快筆「表白御草」」(『逸文』16 昭60・12)、59「如来遺跡講式」(『影印』(明恵上人手訂定稿本光明真言土沙勒信記)昭60・7)等があり、日本私記・続紀宣命・新撰朗詠集・玉造小町壮衰書。

雲州往来・南北相違抄・先徳略名口決を対象とした論考もある。

この期の訓点研究は、国語史研究の面では語彙史に概略的に利用せられる程度で全体的にさほど多くなく、むしろ諸資料間の訓の比較や相承を検討し付訓の方法を考察するなど、資料研究としての深まりを見せている。点法と字派の関連を見るものに60築島裕(国と国昭57・3)、61同(訓訓68)、62勝山幸人(国学院雑誌)昭59・12、63同「法相宗の古点本とその言語」(野州国文学)34・35昭59・12昭60・3、64築島裕「高山寺蔵平安時代古訓点資料書目稿」(高山論昭57・1昭58・2昭59・2昭60・3)、65日本雅幸「空海撰述書伝本一覽稿」(茨城大人文科学論集)14、昭59・3、「白百合女子大学紀要」21昭60・12、66松本光隆「高山寺経蔵寛成本について」(高山論昭60・3)、67同「高山寺伝存の円堂点資料について」(高知大国文)16昭60・12等がある。また角筆関係の小林芳規の論考も少からずあり、それらを集めた単行書の発刊が予告されている。

古代辞書(一一二点)

古代辞書と関連の深い中国辞書については、玉篇・切韻の逸文収集が着々と行われ、68西崎亨「玉篇三教指帰敦光注所引」(逸文8昭57・2)、69神鷹徳治「政治要略所引真本系玉篇佚文広補正」(逸文12昭58・12)、70上田正「切韻逸文の研究」(昭59・2)、71神鷹徳治・当山日出夫「金沢文庫本『白氏文集』所引『切韻』『玉篇』」(逸文14昭59・12)、72井野口孝「新訳華嚴経音義私記」所引「玉篇」佚文(愛知大国文学)24・25昭60・3、73上田正「玉篇逸文論考」(訓訓73)、74白藤礼幸「注釈の輸入」(五味先生追悼論文集)昭59・3がある。また75大友信一・西原一幸「唐代字樣二種の研究と索引」(昭59・2)、

76西原一幸「独立の書誌範疇としての『字樣』」(金城学院大論集)27昭60・3)、77同「敦煌出土『時要字樣』残巻について」(『東方学』70昭60・7)は字樣を字書・韻書とは異なるジャンルとして提唱する。仏典音義では78石塚晴通・池田証寿「レニングラード本一切経音義について」(訓発昭57・5)は玄応音義の原初形態を考察し、74は音義・注疏の唐土及び本邦に於ける関わりを説く。他に79「莊子音義」(天理・漢籍一、昭57・1)、80「増修互注礼部韻略」(天理・漢籍八昭57・3)の影印がある。

本邦の音義では影印に伴う解題・索引が多く(高山寺資料叢書12・古辞書音義集成11・同17・六地6(昭60・10)、またようやく81築島裕「大般若経音義の研究索引篇」(昭58・12)が刊行され、研究篇の成果が待たれている。音義を資料とした国語史研究には82立石広男(日本大文学部研究紀要)26、83小林明美(日本語・日本文化)11、84同(密教文化)14、85清水史「承暦本金光明最勝王経音義音注放」(国学院大大学院紀要)13昭57・3、86遠藤和夫(和洋女子大紀要)24-1、87西崎亨(武庫川国文)24、88同(訓訓73)、88二戸砂彦「醍醐寺本法華経釈文音注放」(山梨県立女子短大紀要)18、昭60・3)がある。

新撰字鏡について、89中田祝夫「新撰字鏡の跋文」考(訓発昭57・5)は跋文を分析して成立意図を探る。90湯浅幸孫(国国昭57・7)も武断的訓誡臭は否めぬながら有益である。成立過程・依拠書に關しては91貞苴伊徳(訓訓67)、92同(国と国昭58・1)、93同「新撰字鏡」抄録本の異本としての一面(訓発昭60・5)、94池田証寿(国語学)130、95同(国語国文研究)71、96西原一幸(金城学院大論集)25、97近藤泰弘「新撰字鏡『時雜要字』小考」(訓発昭58・5)が

ある。いずれも先行説を充分咀嚼した上での論考であり、今後の進展が期待される。

倭名類聚抄については従来に倍する論考があった。98 三宅ちぐさ（東海学園国語国文）は眞仮名の字母の使用状態と諸本の系統との関係を論ずるが、書写年代による差違も無視できず、曲直瀬本・下総本を参看しない調査は片手落ちである。99 佐佐木隆（国国）昭58・3）、100 同（東洋21・8 昭59・9）は職官国郡部の仮名の使用状況が他の部と一体の、和名抄原撰時のものであるとするが、和名抄成立以前の実勢を示す国郡部の、元和本・高山寺本間での年代的差違と付訓の時期及び和名抄への受入時期の先後等微妙な問題を解決していない。101 同（国と国 昭58・7）は十巻本と二十巻本の和訓の語形が異なるものは、二十巻本の方が古い形であるとして二十巻本原撰説を補強するが、挙例の半数に十巻本末流本文を用いている。十巻本祖本と二十巻本後半部との本文対立箇所は一一〇〇箇所に及ぶが、その中の数例が古形であるからとして二十巻本原撰と直ちに言えるのであろうか。102 同（国と国 昭59・6）は原二十巻本に複数系統を想定し、その中で字類抄所拠本を十巻本に近いと推定するが、末流本文を取り去ると論拠を失う。103 同「世尊寺本『字鏡』に引用された『和名類聚抄』（『文学論叢』昭60・2）は砂上樓閣の感を否めない。104 須賀一好（訓訓69）は、条項の配列を二十巻本Ⅱ不整、十巻本Ⅱ整備とする。そして二十巻本原撰説による解釈（未整備から整備へ）が、ここでは前提となつて、故に二十巻本が原撰であると推論する。さほど諸本を参看していないため三十例余の配列異同には言及していない。杉本つとむ編『和名抄の新研究』（昭59・1）には104 近藤尚子、105 佐藤栄作、106 坂本清恵、107 高梨信博、108 小山やす江、109 杉本

つとむの論を収める。109 に対する褒誉は10 佐藤喜代治『和名抄の新研究』を読んで』（昭59・10）に示されているので多くを記さぬが、従来誰しも疑問に感じながら表立って指摘されなかつた事柄を果敢に問題提起した点と、和名抄を読み込むことによつて研究を深めようとする姿勢には好感が持たれる。ただ、それが嵩じて元和本のみによつて得られた炯眼ともいふべき論説の中には、文献学的基礎操作を以てすれば迂遠の推論を経ずとも容易に論証できると思われるものもあり、また和名抄に対するに「和名抄とはかくあるべきもの」という先見によつて云々する傾向が強過ぎはしないか。これらが104 105の論に柵械となつて働いているように思われる。この両論は元和本にこだわらず、大東急本に依る方が生産的である。

諸本等の研究には111 高橋宏幸「和名類聚抄」（浄土三部経音義集所引）（逸文8、昭57・2）、112 同「高松宮家御所蔵和名類聚抄をめぐつて」（訓究 昭57・5）、113 宮沢俊雅（北海道大人文学論集 18・19）、114 同「倭名類聚抄京本解題」（東大）、115 柴田昭二「信瑞纂浄土三部経音義集」（『香川大国文研究』10 昭60・9）がある。111は信瑞音義所引の和名抄本文を収集し、所拠本が下総本の祖本に近いことを証する。115は111と軌を一にする。

和名抄の成立に関する漢語抄類の研究も数を増した。既掲92は基本となる論考であらう。97も新知見を示し、旧稿ではあるが116 山口角鷹「日本漢字史論考」（昭60・1）もこれに関連する。117 河野敏宏（岡大国文論稿）11）は和名抄と本草和名とを両者の性格をそれぞれに理解した上で対照させ相互の関係を論じた正統的研究である。118 森田梯「『文字集略』」（逸文16 昭10・12）は文字集略の逸文を集め、これを漢語抄であると説くが通説では梁の阮孝緒の撰である。119 菊田紀

郎「石山寺藏『香字抄』と和名類聚抄」(同)は兼名宛に和訓があつたとするが、これも唐の釈遠年の撰とするのが一般である。120 江口泰生「高山寺本『和名類聚抄』の声点」(『岡大國文論稿』13、昭60・3)は漢語抄類所規の和訓の多くが差声時には古語となつていたことを論証する。なお120同(『國語学』14)が、俗音等の注字を漢音で読むことによつて被注字の吳音が得られることを証した功は大きい。

箋注との関連では122梅谷文夫(『國と國』昭57・2)は板倉の校訂方針を考察しその問題点を示す。123不破浩子(『叙説』8)は箋注が誤とする箇所を誤とせず解釈し得ることを検証する。特異な方法ではあるが、あるがままの和名抄に対する理解は深められている。

類聚名義抄については改編本諸本の関係を見るものに124草川昇(『訓訓』68)、125同「『類聚名義抄』の和訓について」(『訓発』昭59・5)、126山本秀人(『國語学会発表』昭59・10)、127同「改編本類聚名義抄における文選訓の増補について」(『國文学攷』105、昭60・3)、128同(鎌倉8)がある。128、129が三本の系統を明かにし128は四本の関係を分析している。両論補い合つて四本の系統が推定できるのは喜ばしい。129貞貞伊徳「観智院本類聚名義抄の形成に関する考察」(『訓発』昭58・5)は広益玉篇との関りを見事に論証する。130望月郁子(『静岡大学教養部研究報告』19・2)、131同(『訓訓』73)、132同(『訓訓』75)は論者に特定の方向性があるため、それを追いつけない読者にとっては難解又は繁瑣であり新知見もその中に埋没し勝ちである。この方向性が先行説の十分な咀嚼を妨げていると感ぜられる。

圖書寮本については133原卓志・山本秀人(鎌倉6)が玄応音義との対比を行なつて出色である。難を言えば全数調査でないことと名義抄の側からの一方通行であることであろうか。132の篆隸万象名義と

の対比も全数調査でないが新知見は評価できる。

字類抄の諸系統を見るものには134峰岸明(『國語』昭59・9・11)、135同「世俗字類抄二卷本解題」(『東大』の重厚な論がある。他にも136三宅ちぐさ(『岡大國文論稿』12)、137村田正英(鎌倉5)、138同(鎌倉7)、139原卓志(『國文学攷』97、140同)「色葉字類抄における類書の受容」(『広島大文学部紀要』44、昭59・12)、141河野敏宏「十卷本『伊呂波字類抄』の位置付け」(『訓発』昭59・10)と多士濟々であるが、相互の説の整合検証が未だ十分でないような気もする。

色葉字類抄の注記を取り上げての論には142山田俊雄(『成城國文学論考』14)、143相坂一成「色葉字類抄の一語彙群」(『古典の変容と新生』昭59・11「金沢大國語国文」昭60・3)、144高松政雄(『訓訓』69)、145原卓志(鎌倉8)がある。142、143は既に周知の論考の追補の形をとるが新論でもある。

他に146高松政雄(『岐阜大國語国文』15)、147太田晶二郎「尊経閣三卷本色葉字類抄解題」(『前田育徳会』「色葉字類抄」昭59・5)がある。

抄物(五四点)

影印・索引は一五点程あり、論考は國語史研究・資料研究各二〇点内外、傾向としては前者の比重が大きい。主な資料研究を掲げれば148国田百合子「長恨歌琵琶行抄諸本の國語学的研究」(昭57・2、昭58・2、昭59・2)、149樋渡登(『定学研究』24)、150同(『都留文科大研究紀要』19)、151柳田征司(『曲直瀬道三類証并異全九集』)、152同「高山寺藏『無門関抄』について」(『高山論』昭58・2)、153古田雅憲(『文献探究』14)、154高見三郎(『國語』昭60・12)、155秋山洋一「『禪林類聚音義』について」(『國學院大國語研究』49、昭60・12)等。また書目に156

柳田征治(「愛媛大教育学部紀要」II 14・15)、157同(「抄物の研究」5)、158同(「訓訓70」)がある。159同「抄物言語研究の回顧と展望」(「愛媛国文と教育」昭57・6)も注目される。抄物分野は資料研究としての深まりを見せつつあるが、それゆえに国語史研究への「危機意識」も強まっているようである。160出雲朝子「玉塵抄を中心とした室町時代語の研究」(昭57・10)の表題はその象徴であろうか。

中世辞書(三六点)

161安田章「中世辞書論考」(昭58・9)は中世辞書を特定文化相を背景とする資料群として捉えた好著である。ここに中世辞書は文化史としての「広義の」国語学史の中に確固たる位置を与えられたと言つてよい。他に主な研究としては節用集では162片岡了(「大谷大学本節用集研究並びに総合索引」)、163今西浩子(「訓訓68」)164大熊久子(「国学院雑誌」昭59・2)165同(昭60・6)、163高梨信博(「国文学研究」83)等があり、運歩色葉集の167清水登(「長野県立短大紀要」37〜39)、類集文字抄の168榊原邦彦(「豊田工業高専研究紀要」15)がある。また木村晟らに依る翻字・索引が「駒沢国文」・近思研究等に続々と出されている。

中国朝鮮資料(一三二点)

この分野では169浜田敦「統朝鮮資料による日本語研究」(昭58・8)を初めとして十編余の論考があった。展望子余りに不勉強で論評は思いも寄らないので次の二点を紹介するにとどめる。170李元植「朝鮮通信使に随行した倭学訳官について」(「朝鮮学報」III 昭59・4)、171韓美卿「『捷解新語』의 敬語接頭辞「御」에 대하여」(「日本文化」1

昭60・4)。

キリシタン資料(七一点)

影印・翻字・索引を除けば大半は国語史研究であり、資料研究はその半余に満たない。しかしこの分野は国語資料として利せられてきた歴史もあつて資料研究も進んでいる。その中でも172亀井孝・H「チースリク・小島幸枝「日本イエズス会版キリシタン要理」(昭58・7)、173清瀬良一「天草版平家物語の基礎的研究」(昭57・12)、174遠藤潤一「邦訳二種伊曾保物語の原典的研究」(昭58・2 昭59・2)があつたことは目ざましい。この他にも175福島邦道「続キリシタン資料と国語研究」(昭58・7)、176豊島正之(「国と国 昭59・1」)の論があり、資料への深い沈潜を経た177小島幸枝(「独協大学教養語学研究」17〜20等)の論考もある。

近世資料(五二点)

近世資料という資料群を認定したわけではないが、国学・蘭学・洋学以外の資料の研究を便宜的に一括した。近世語の資料は文学資料が多く、資料研究が国語学分野内に容認されるかどうか、背景に文化相を持つ資料群を設定できるかどうか不確かである。それでも近年の論考では、まず漢学の分野が目立って来ており、178村上雅孝(「文芸研究」100)、179同(「講座日本語の語彙」5)、180同(「兼史」5)、181同「林鷲峰の「公羊伝・穀梁伝」刊行をめぐって」(「汲古」7、昭60・1)、182戸川芳郎「羅山点「春秋穀梁伝注疏」」(同)183柏原卓(「語文研究」52・53)、184新川正美(「香川大國文研究」7)、185近藤尚子(「国語学研究と資料」7)、186同「概念の連鎖——『記室初篇』の文字排列法について」(「国

文学研究」86 昭60・6）、187石川洋子（訓訓73）、187同（近世「也」字の和訓について）（実践国文学」28 昭60・10）等がある。また188金田弘（国学院大学紀要」21）、189同（現代方言学の課題」3）、190望月正道（文献探究」12）、191同（語文研究」56）、192福石妙子（静岡女子大学研究紀要」17）等聞書類を対象とした論考もこの分野に属するであろうし、近世辞書を扱った193高梨信博（国文学研究」77）、194崎村弘文（文献探究」12）、195菊田紀郎（兼史5）、196岩野靖則（関西学院大人文論究」34-11）、197柏原司郎（合類節用集」の「多識編」引用態度）（国学院大国語研究」49 昭60・12）もこれと関連する。

唐通事関係では198蘆科勝之（武蔵野女子大紀要」17）、199同（文経論叢」19-3 昭59・3）、200大橋百合子（語文研究」55、59「江戸時代文学誌」4）が挙げられる。

なお特異な資料を扱ったものに201清瀬儀三郎「音声史料としての盲暦」（音声学会会報」170 昭57・7）がある。

蘭学・洋学資料（三三五点）

対象資料別に見るとアストン口語文典（202渡辺修（大妻女子大文学部紀要」14・16）、203同（大妻国文」14）等）・ギュツラフ約翰福音之伝（204岩崎摂子（女子聖学院短大紀要」14・17）、205同「善徳纂」約翰福音之伝」（昭59・2）、206新山茂樹（鶴見大紀要」19）、207同（現代方言学の課題」3）等）・和英語林集成（208菊池悟（文芸研究」1・3）、209同（国語学研究」23・24）等）が目立ち、また語厄利亜興学小笈・語林大成の影印に関連して数編の論考があった。また杉本つとむの精力的な執筆も続いている（210「日本翻訳語史の研究」昭58・6）等）。その他扱われた資料には英語箋・英和俗語辞典・舎密開示・訳

鍵・和蘭字彙・民間格致問答・蘭学事始附記・和独対訳辞林等がある。

（付記）

国語史の資料は本来国語史研究の為にあるものではないから、資料研究は必ずしも国語学研究とはならない。文学作品の資料的研究は、それがいかに重要な国語史資料であろうとも国文学の分野に含まれる（たとえ国文学界内で白眼視されようとも）。本項で国語学の分野として容認されたとした資料群にしても事情は同じであり、資料の本来的な研究は国語学から遠ざかる。「国語学者」が資料研究に深入りすることは、その存立自体が失われる危険すらある。しかし資料の「国語学的研究」にのみ終始するのも資料本来の研究としては邪道である。そのような矛盾を超越した所に資料研究は成り立つ。本項で設定した資料群は、近世資料を除けば、この意味でそれぞれに分野を形成していると私に判断したものである。

本誌展望の「資料」は「学史」と離合を繰返している。国語学史は屢々「広義の」「狭義の」という冠辞が付されるが、「広義の」国語学史は「国語意識史」なるものとも絡み合う。発達史観に立つ国語学史は暫く措くとして、文化的観点からの「広義の」国語学史を、資料群の背景となる文化相の変遷を経として、国語意識を緯として見ることはできないか。今回はそのような視点に立つて資料研究の展望を試みたつもりである。その意味で「学史」「資料」の併合も不合理ではない。

今後の「資料」展望の有り方の為に参考までに言えば、「学史・資料」の項に含まれると期待される論考は多様である。①近代の国語学史。②テニハ・仮名遣・国学研究。以上は「学史」に含まれるのが慣習である

う。③訓点・抄物・キリシタンの資料研究及び古辞書研究。「学史」と「資料」の定義次第で双方の対象外となることが多い。④影印・翻字・索引の出版公刊。多くの人はこれが「資料」だと思っている。⑤特定資料の国語学的研究。資料を扱っているから「資料」分野と見なして他の項（文法・音韻など）で対象外とされることがありうる。⑥参考資料（国語年鑑の「資料」の項参照）。これら総ての論考等を合せるとその数は、私の概算では二年間で二千点を超える。前回の展望号での欠落も故無しとしない。

——北海道大学助教授——